

# 感染症発生動向調査委員会報告 4月

## 《今月のトピックス》

- インフルエンザは、終息に向かっているが、この時期としてはまだ発生が多い
- 東京、埼玉で麻疹が流行、横浜でも発生が増加しており、流行拡大に注意

### 【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点:84か所、内科定点:55か所、眼科定点:15か所、性感染症定点:26か所、基幹(病院)定点:3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成19年3月19日から平成19年4月22日まで(平成19年第12週から第16週まで。ただし、性感染症については平成19年3月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

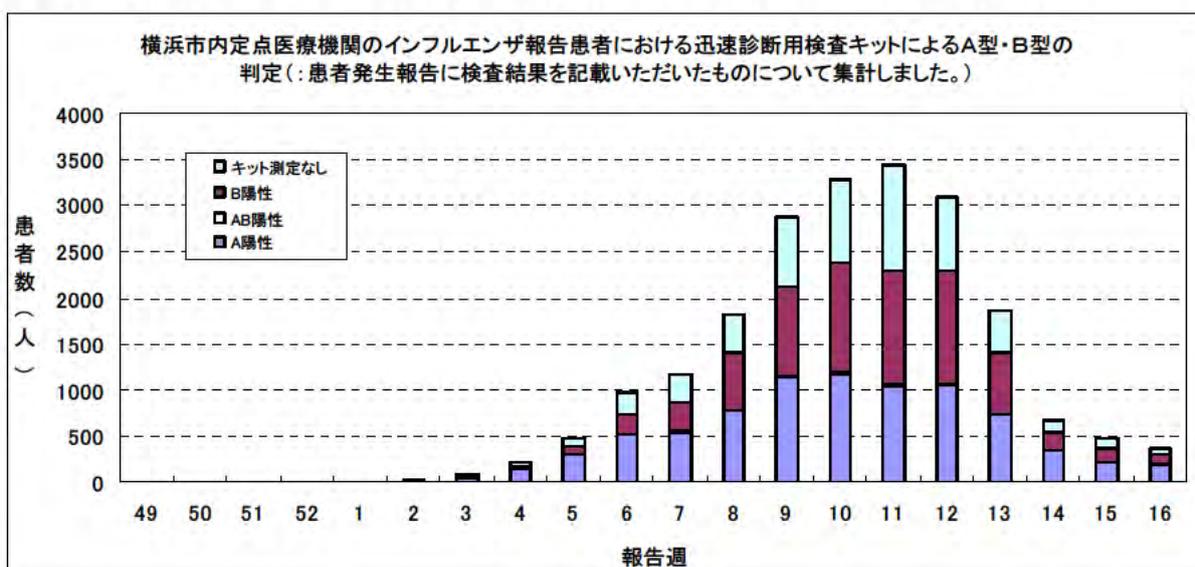
### <インフルエンザ>

定点あたり患者報告数は、第11週の26.8をピークに減少を続け、第16週は、3.28でした。横浜市におけるインフルエンザの流行は、ほぼ終息に向かっていると思われます。神奈川県(横浜、川崎を除く)は3.30、川崎市は2.79と同様に低くなっています。ただ、今までに、第16週で1.0を下回らなかった年はありませんでした。また、全国は第15週で7.1と高いので、まだ注意が必要です。

横浜市内の病原体定点の検体からの、横浜市衛生研究所における第16週までのウイルス分離・検出数は、Aソ連型 7、A香港型 59、B型 58となっています。全国の地方衛生研究所からの報告によれば、4月25日現在、Aソ連型273、A香港型1704、B型1450です。

平成19年 週—月日対照表

第12週	3月19～25日
第13週	3月26～4月1日
第14週	4月 2～ 8日
第15週	4月 9～15日
第16週	4月16～22日



以前より、定点報告の際、インフルエンザ迅速診断キットの結果をご記入して下さる場合があり、結果を集計していました。今年からは、任意ですが、届出様式に報告欄を設けました。のべ報告数のうち、ご記入いただいている割合が、今シーズンは約40%で、昨年(15%)、一昨年(10%弱)に比べ、増加しました。

#### <咽頭結膜熱>

横浜市では、昨年と同様、例年よりやや高めで、定点あたり0.25前後の横ばい状態が続いていて、第16週は定点あたり0.34と少し増加しました。区別では、定点あたり2.5と相変わらず磯子区での発生が目立っています。港北区も1.8と、先月に比べてかなり増加しました。昨年は、4月末から5月初めの早い1時期に立ち上がり、大きな流行があったので、今後の動向には注意が必要と思われます。

#### < A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

第3週に急に増加し、高いレベルで増減を繰り返していました。第13～14週は減少しましたが、また少し増加し、第16週は定点あたり1.57でした。

神奈川県(横浜、川崎を除く)は2.06、川崎市は2.34と、どちらも横浜市より高い値です。区別では、都筑区での発生が目立ち、警報レベルの4をこえる週が多く、第15週は13.0でしたが、第16週は3.0と減少しています。全国でも昨年同様高い値が続いており、第12週からは減少していましたが、第15週は1.60とまた少し増加しています。引き続き注意が必要です。

#### < 伝染性紅斑 >

例年に比べて高めの値が続いていましたが、第16週は定点あたり0.57と、例年並みの値でした。全国では、増減はあるものの、過去5年間の同時期と比較してかなり高い値が続いていて、第15週は定点あたり0.63でした。例年、6月頃が一番高いようなので、今後の動向には注意が必要です。

#### < 麻しん >

現行の感染症発生動向調査では、2001年をピークに減少、2004年に激減、2006年は、全国で520人、横浜市では16人という年間患者報告数でした。(下記麻しん年間患者報告数の表を参照)

	1999(年)	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006
横浜市	130	236	533	278	174	18	10	16
全国	5875	22552	33812	12473	8285	1547	537	520

しかし、2006年の4～6月には、関東を中心とした麻しんの流行が報告されました。2007年に入って、全国的には過去2年と同様に低い状態が続いていますが、関東での発生は継続していました。

国立感染症研究所から、南関東における麻しんの流行についてのコメントが出たのを受け、4月17日新聞で「はしか、東京や埼玉で流行拡大の恐れ、注意呼びかけ」との報道がされました。その後、東京都では、大学での集団感染も報告されています。

感染症発生動向調査においては、麻しんは小児科定点から報告され、届出基準では、15歳以上は除くとなっており、一方、成人麻しん(15歳以上)は基幹定点(病院)から報告されることになっています。ただ、成人麻しんの患者が、基幹定点ではなく内科・小児科を受診する場合もあり、その場合は、小児科定点の報告に記載されてきます。

横浜市では、2007年は、第3週に1人(10～14歳)報告があって以降は、ずっとありませんでしたが、第14週に3人(6～11か月2人、1歳1人)、第15週に2人(10～14歳1人、20歳以上1人)、第16週に8人(6～11か月1人、8歳2人、10～14歳2人、15～19歳2人、20歳以上1人)と、このところ報告が目立っています。今後、近隣の状況も含めて、動向に注意する必要があります。

#### < マイコプラズマ肺炎 >

3か所の基幹定点医療機関からの報告に基づいているため、総数で比較しました。昨年はかなり多く、年間で92人の報告がありました。今年に入ってから、今までに14人の報告がありました。全国での報告は、先月までよりは減少してきていますが、過去5年間と比較するとまだ多い状態です。引き続き今後の動向に注意が必要と思われます。

#### < 性感染症 >

性感染症は、診療科でみると産婦人科系(産婦)の11定点、および泌尿器科・皮膚科系(泌・皮)の15定点からの報告に基づいて集計されています。

性器クラミジア感染症と性器ヘルペス感染症は、定点あたり報告数が2月より増加しており、昨年よりも高い値でした。性器ヘルペス感染症については、再発することが多いため、2006年4月からの新しい届出基準では、「明らかに再発であるもの及び血清抗体のみ陽性のものは除外する」となっています。ただ、再発かどうか不明なのか、高齢者の報告が多い傾向があります。今回の報告でも、男性で、60代が2人、70歳以上が1人ありました。

#### 【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

#### 衛生研究所から

##### <ウイルス検査>

2007年4月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点から42件(咽頭ぬぐい液)、眼科定点から2件(結膜ぬぐい液)、基幹定点7件(髄液・血清各2件、咽頭ぬぐい液、気管吸引液・便各1件)でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎38人、発熱のみ・関節痛・頭痛・下痢症状は各1人、眼科定点は、結膜炎・角結膜炎各1人、基幹定点はインフルエンザ・脳炎・筋炎・発疹症でした。

5月10日現在、小児科定点の気道炎患者3人、頭痛患者1人の検体からインフルエンザウイルスAH1型、気道炎患者10人の検体からインフルエンザウイルスAH3型、気道炎患者5人、関節痛患者1人の検体からインフルエンザウイルスB型が分離されています。

これ以外にPCR検査では、小児科定点の気道炎の患者4人からRSウイルス、別の気道炎の患者1人から麻疹ウイルスが検出されました。

その他の検体は引き続き検査中です。

##### <細菌検査> (検査結果の詳細は、10ページに掲載されています。)

4月の感染性胃腸炎関係の受付は5菌株で腸管病原性大腸菌と毒素原性大腸菌が各1件検出されました。溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体の受付は3件でA群溶血性レンサ球菌が1件検出されました。